

京都大学パネルディスカッション発言要旨

有限責任中間法人 ジャパン・リサイクル・アソシエーション
代表理事 藤田 惇

はじめに

私たちジャパン・リサイクル・アソシエーション（以下 JRCA）は、リユース業界の地位向上を目指す為に設立された有限責任中間法人です。全国の古物協同組合、古物市場、リユースを営む会社、個人経営者などから為っており零細企業から、比較的大手と言われるような企業まで加盟しています。日本国内の中古事業者が集まった団体としては最大規模のものになるため、広くリユース業界の実態を調査することが出来ます。

設立の経緯を簡単に紹介します。きっかけは 2006 年の電気用品安全法の改正でした。電気用品の規格に新基準が設けられ、それを満たさない製品は販売してはならないという規制がされました。製造事業者らには通達がされていましたが、二次流通のマーケットに知らされたのは、施行直前のことで、私たちリユース業界には激震が走りました。製造業者は、新基準の製品を開発すればいいわけですが、私たちは、既に流通しているストックを再販するという商売をしています。消費者が今所持している製品も、店の在庫も販売できなくなれば廃業するしかありません。そこで、業界で団結して国に声を届ける活動を始めたのです。結果、経済産業省は旧基準の製品と新基準の製品の安全性を比較する実験を行い、同レベルの安全性が確認されたことを受け謝罪し、新基準は取り消しになりました。

私たちは、この後も国にリユース業界の実態を報告したり、中古品の販売という切り口で国民生活への寄与を行う活動や、環境問題に関する勉強会を続けています。本日のテーマの中心となる循環型社会の活性化だけでなく、低所得者層の生活を支えているという大きな役割もあります。例えば、北海道などの寒冷地ではストーブがなければ凍死してしまいます。季節労働者や年金生活者などに中古品を供給する役割の重要性を強く感じています。

業界の地位向上に留まらず、リユースという切り口で、国民・社会・環境に貢献する非営利の団体として活動に注力する所存です。

私たち JRCA は、“皆で守ろう地球環境”をテーマとし、3R（スリーアール）を推進します。

■ 3R とは

- ① R e d u c e（リデュース）・・・廃棄物の発生抑制
- ② R e u s e（リユース）・・・再使用
- ③ R e c y c l e（リサイクル）・・・再資源化

① リデュース（廃棄物の発生抑制）

私の私感としましては、まず 3R を念頭に置いたモノ作りをメーカーがすべきだと考えています。機能・利便性・デザインを追及するのはいいのですが、最終処分のことまで考慮に入れ、出来るだけ長く使えて、不要になった時に再資源化しやすい構造になっているような商品づくりをしなければならないと思います。製造された商品はいずれどこかで廃棄されます。製造の時点で、環境代金、または最終処分料金を課金することも考える必要があるのではないのでしょうか。この事は、現在のリサイクル法にも関係してくると思います。

資本主義の原理から少し掛け離れているかもしれませんが、いくら沢山の商品を作ることは自由といっても、物をつくる事業者は、廃棄する事に、そして環境に対して、生産者として責任があるのだと改めて意識して欲しい。

製品をつくるという事は、どうしても限りある資源を使い、CO₂ を排出し、環境破壊に繋がります。

CO₂ を削減し、温暖化を止める為には、必ずお金がかかります。そのコストは製品に上乗せするのか、メーカーが原資を出すのか。その辺りは議論しなければならないでしょう。

環境問題ばかり尊重し過ぎると、今度はメーカーが企業として成り立たなくなる恐れがあるという意見があることは重々承知していますが、地球環境は、もう待たないという実態を強く認識し、利益だけを優先するのではなく、地球環境を考え、環境負荷を下げるビジネスモデルを組立てなければなりません。

極論になりますが、どんなに良いものを作っても、利便性に優れていても、環境破壊をする企業は存続してはならない時代になったのではないのでしょうか。

大量生産、大量販売、大量廃棄の使い捨ての時代はすでに終わっているという認識を高めなければなりません。

安い労働力を求めて、海外で安価な製品を乱造するということにも限界がある時代にもなりました。

このように3RやCO₂の削減を考えれば、回転率を高めることによって利益を得るような今までような安売り合戦は出来ないはずです。

多少割高でも頑強で長寿命な製品を消費者に提供し、何年もかけて大切に使う中で減価償却をしてもらう。そして最終処分の際には、資源としてスムーズに循環させるという仕組みが望まれると思います。抜本的で大変難しい取り組みになろうかと思いますが、是非、いち早く取り掛かってほしいものです。

今すぐ温暖化に急ブレーキをかけても、何十年先で影響がストップするのか予測がつかない現状であり、世界には66億人の人間、動物が生存していて、地球環境の温暖化は待ったなしであります。

自分たちが生きている時代は大丈夫だ、100年先の話だという、無責任極まりない発言を耳にすることがありますが、冗談にしてもナンセンスな話であります。「皆で守ろう地球環境」を一人一人がしっかりと意識し、少しずつ貢献していく事が大事なのではないのでしょうか。

日本は、もともと環境先進国として、むしろ他国の製造業事業者を技術力でリードしていく存在にならなければなりません。

②リユース（再使用）

再資源を使用しても、新しい製品を製造する際には新たに多くの石油を必要としたり、温室効果ガスを排出したりする宿命にあります。そこで、リサイクルの前に重視されるのが、特に私たちリサイクルショップが行っているリユースです。

中古品の流通を活性化するためには、安全性を担保する必要があります。そこで、JRC Aでは点検・整備のガイドラインをつくり、それを遵守する店にSR（セーフティ・リユース）マークを看板などに掲げさせるという、SR制度をスタートしました。これを目安に、消費者に安心して買い物をしていただけるように周知にも努めていきます。

現在、私たちリユース業界で重要視していることの一つに、もったいない精神の復興があります。まだまだ5年、10年と使えるものがどんどん廃棄されている現状を懸念しています。

その原因はどこにあるのかを次に列挙します。

- (1) 現状のニーズに法制度がマッチしていない。
- (2) 安価な新製品が簡単に買える。
- (3) 物を大事にするという教育の不足。
- (4) 面倒臭い、邪魔臭い、みんなまとめて廃棄してしまおうという使い捨ての感覚。

物を大事にする、もったいないという精神は、本来日本の文化でした。今、この精神を再び高める必要があると思います。世の中には、はやり、すたりがあり、人々の気持ちはその流れに沿っていきます。ただ、誰かにとって不要になったものも、他の誰かの目から見るとまだまだ使用できるケースがたくさんあります。この橋渡しを行い、最大限製品の寿命を全うさせるのが私たちリユース業の存在です。

リユース業者がみて、リユース出来る物はセーフティリユース（安全を保証したリユース）していく、商品の寿命を理解して、最後まで使い切る工夫をし、寿命が尽きたらリサイクルに回すという流れを考えています。

1年2年3年と物の寿命を延ばすことが、いかにCO₂を減らし、地球温暖化に寄与しているかは計り知れません。地下資源の少ない日本国では、循環資源の活用や3Rを考えない活動はいつか行き詰るでしょう。JRCAではこの考えのもと、社会の賛同を得る努力をし、一層リユース率を高めることに邁進して参ります。

③ リサイクル（再資源化）

東京や首都圏で排出されるごみは東京湾を埋め立てた「夢の島」や、千葉県に埋められておりますが、東京都は、今後この埋立地を作る計画は立てておりません。すると、東京都首都圏は現状にある場所で、ごみ問題を解決していかなければならず、現在のスピードでごみが排出されると、埋め立て地の許容範囲は十数年だと言われております。

新しい資源を出来る限りつかわず、出来る限り再資源化して、循環させていく為の努力をしなければなりません。ケースバイケースとなりますが、CO₂削減の為には、どちらが有効なのかも勉強しなければなりません。世界的にも資源は限りあるものですから、早く『グローバル循環型社会』を形成すべきと考えております。地球温暖化は日本国だけで、止められる訳ではなく、世界中が共通の問題として共有しなければなりません。

日本で不要と判断された商品も、海外では大切に使われているケースがあります。日本の技術力は高く、中古品が国内の省エネ基準から見ると少し遅れていても、海外で生産される製品よりも省エネレベルが優れている場合もありますし、モノの寿命を延長することもできます。ただ、中古品を安値にて後進国へ回せば、輸出先の国ではどのような処理がされているのか分かりません。製品には必ず寿命がある訳ですから、必ず廃棄されます。きちんと技術力のあるリサイクルプラントで再資源化されているのか、トレースする必要があると思います。

マスコミの報道などで、外国のリサイクルとは貴金属だけを取り除き、後は、埋めてしまうため土壌汚染が蔓延していると聞きます。メーカー、販売業者、ユーザー、国が利害や立場を超えてきちんと対応していく、また、ルールを守る仕組みを作っていくことが大切かと思います。そして、循環型社会の形成に役立てるべく思考を持って取り組んでいくべきだと思います。時代の流れは早く、今、世の中、市場経済の動向、変化に対応出来ない法律があれば検証した上で変えていく必要があるのではないのでしょうか。

1つの製品を作り、その製品の役目が終わり、リサイクルに回った時に何に生まれ変わるのか、リサイクルする時に、コストとCO₂の使用が少なくてすむ製品づくりが遠からず行われることを願います。その製品こそがこれからの真のヒット商品となっていくはずです。

今述べました3Rの促進は国を挙げて、急速に加速しなければならないことではないのでしょうか。

以上